

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡 —塚原光男 選手—

亀山 有希 (スポーツ社会学研究室)
清宮 孝文 (スポーツ社会学研究室)

本稿は、「研究プロジェクト:日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した、オリンピックメダリストへのインタビューをもとに構成されている。

本インタビューは平成29年12月8日(金)に塚原光男氏にお話を伺った。

【経歴】

1966年3月 國學院高等学校卒業
1966年4月 日本体育大学体育学部体育学科入学
1970年3月 日本体育大学体育学部体育学科卒業
1970年4月 河合楽器入社
2002年 塚原体操センター設立

【競技歴】

1968年 オリンピックメキシコシティ大会 団体総合優勝, ゆか4位, つり輪4位
1972年 オリンピックミュンヘン大会 団体総合優勝, 鉄棒優勝, つり輪3位
1976年 オリンピックモントリオール大会 団体総合優勝, 鉄棒優勝, 跳馬2位, 個人総合3位,
平行棒3位

1. 器械体操との出会い

誰もできないことをやるのが大好きな少年だった, 小さいときから。「例えばうちの近くにすごい木があって, 誰も登れないのよ. 枝がなくてね. それを1人で登って行って, 得意になって『どうだ』って言ってました. そうしたら, まだ小学校の小さい頃だから下りらんなくなっちゃった. 町内会の消防団がみんな来ちゃって下してもらって, 両親からこっぴどく怒られた. また, ある時は, 高い塀があると1人でそこへ登って, わあって歩いたりしてたね. そういう高い所が好きだった. とにかく, 誰もやらないことが大好きだった. みんなをわあって驚かす, おっちょこちょいな少

年だったんです」と塚原氏は少年時代のエピソードを語ってくれた。

スポーツの出会いは草野球が始まりだという。「昔, 僕らの時代のスポーツっていうと野球だった. 王さんや長嶋さんにみんなが憧れて, 草野球に近所の子どもたちが集まって野球の好きなおやじが監督代わりになって. 近所の子ども達と草野球をやって, それをずっと楽しんでた. みんなで背番号3番を取りあったりしてね. 長嶋さんの背番号「3」や王さんの背番号「1」とかね. 僕らも野球選手に憧れて野球をやった」そうだ。

その後, 中学校進学時に器械体操と出会うことになる. 入学の日, 中学校の校庭でクラブの勧誘会が開かれていたときの事だった。「体操競技部

が鉄棒のデモンストレーションをしていて、宙返りをやったのを見て、『すごい、これは人が簡単にできる世界ではない』『これは面白そうだ』と思って体操競技部にそのまま入った。「鉄棒は立体感があり、且つダイナミックなことからみんなを魅了できると思ったんじゃないか」と塚原氏は続ける。

また、野球から器械体操に転向したのは、野球部のみんなと比べると体格が小さかったからだという。宙返りにあこがれて入部した体操部であったが、待ち受けていたのは「腕立て伏せ100回」「腹筋何100回」といった基礎中の基礎である筋力トレーニングだった。「強くならないと、筋力を鍛えないと大技に挑戦できないから」と言われ、そうかなと思ひ、素直に取り組む日々が続いた。

塚原氏曰く、「懸垂100回とかそんなのばかりやって、クラブ活動が終わる毎日だった」ことから、一人また一人と部員・仲間がいなくなり、気がつくとも夏までには5、6人しか新入部員がいなくなった。一方で、自分自身は将来、「宙返りのようなすごいことができる」ことに憧れて、希望を持って練習に取り組んだ。「なんだ、こんな練習しなきゃいけないのとかという思いと宙返りのようなすごいことができる憧れの狭間にいるようなもの」が体操選手であり、この原体験が後の「ムーンサルト」につながっていく。

塚原氏がオリンピックをはっきりと意識するようになったのは、1964年の東京オリンピックである。塚原氏が高校2年のときであった。実家が自営業（塚原工務店）のため、気がつけばその跡継ぎの訓練をさせられていた。実際に塚原氏はそろばんや習字が得意でもあった。このような習い事をしてきたことから、「将来、商売人の跡継ぎになるわけだから、おやじなんかもおふくろも僕にそういう期待をしてたと思う」と語る。

ところが、当時は体操競技では全国大会がない環境の中で、塚原氏は東京都で1番になったことをきっかけに、「僕が体操にも本気になって一生懸命になっちゃってるのを見て、一応受験は蔵前

工業っていう建築科を受けて、そこへ行けば当然おやじの跡継ぐわけなんだけど、滑り止めで國學院高校っていう体操の強い学校選んでね、あえて、そうしたら両方受かっちゃって、自分としては素直な人間だから両親の意向に沿って蔵前高校行こうかなって思っていたら、おふくろが『國學院高校のほうに入学手続きしてきたから、おまえ、体操、やりたいんだろ』って言ったおふくろのそういう一つの決断で体操の道に入るようになった」という。

塚原氏が通った國學院高校は神宮にあった。千駄ヶ谷の駅から降りて神宮の野球場までいく通学路の間に東京体育館があった。オリンピックが開催されている所を毎日行き来して通う状況だったため、「ここでオリンピックやってるんだ」との認識が強くなった。当時はカラーテレビも始めて、東京オリンピックを情報として知る機会が増えていったという。日本の男子体操が金メダルをいっぱい取る姿やソ連というライバルがいることもその時はっきりと認識するようになり、「世界はすごいんだ」「これがオリンピックだ」と衝撃を受けた。「オリンピックというのは体操競技じゃなくて国が大変な、国民が一体となったすごいイベントだったから、オリンピックっていうのはすごいイベントなんだということを今は覚えているよね。だから自衛隊が五輪の輪をつくったり、それこそオリンピック運動で周りの人がみんなボランティアで手伝っていたりとか、僕もそういう中でオリンピックをずっと体操中心に見てきた。要するにオリンピックっていうイベントを意識した瞬間ですよ。新幹線はできるは、高速道路はできるは、東京の街が一気に変わり、すごいな、オリンピックっていう印象がすごく強かった。でも、オリンピック選手に自分になるなんてことは夢にも思っていなかった。」と当時を回想した。

2. 日体大での思い出

高校を卒業後、塚原氏は恩師（ササキコウヘイ

氏)が日体大のキャプテンだったこともあり、日本体育大学へと進学を決意する。特待生として、推薦枠で入学した。体操がたくさん練習できると聞いていたが、日体大は人が多くて当時400人、500人近く体操部員がいたと記憶している。体育館は人だらけであり、レギュラーだけが中心に練習する一方で、新入生は横っちょのほうで一生懸命コソコソ練習するような環境だった。「幸いに僕もその素質があったんだろうか、1年からレギュラーになって、レギュラーになってインカレなんか挑戦していくという、そういうレベルで体操はやってはいたんですね。でも、僕はインカレの練習よりもいろんな技に挑戦することが大好きだった。異色だったかもしれませんね。他の選手たちは、試合のための練習を毎日こつこつやるんですよ。僕は違うこと、新しいことに挑戦したりとかする。そんなことですぐ遊んじゃうから、だから指導の先生方から嫌がられてましたよ」と、その頃の様子を塚原氏は振り返る。

当時のライバルは東京教育大(現筑波大学)で、体操界では周知の争いだった。「インカレで日体大は勝たなきゃいけないかった。それが日本の体操の競技力を支えていたというのも事実でもある。」と塚原氏は語る。その競い合いがイコール世界のトップレベルの技術レベルだった。当時のソ連なんか関係なしに、日本の体操界だけで競い合っていた。

このような状況にあっても、塚原氏は新しい技に挑戦する時間が一番楽しい時間だったようだ。インカレのための練習は同じことの繰り返しで、失敗したらやり直しをさせられる。自分だけの範囲ではなくて、他の人が失敗したのにまたやり直しさせられることもあった。しかし、学年があがるにつれて自分の自由時間がどんどん増えていく。「最後のほうには先生も諦めてたみたいで『塚原、勝手に練習しろ』っていうような感じになっちゃってね。そういう意味では先生の言うとおりなんか全然やらなかったから嫌がられていたとも思う。当時の指導法としては先生が指導し、

作ったプログラムをやっていくのが主流だった。今のように技術が解明されてないから、どっちかっていうと『やれ』とか『こうせい』とか『頑張れ』なんていう世界なんですよ。そういうのあんまり好きじゃなかった」と語る。このように塚原氏が体操競技に向き合う根幹には「何かに挑戦したい=楽しいこと」という体操観が存在している。

3. オリンピックでのメダル獲得

日体大を卒業した塚原氏(1968年頃)は、鉄棒の屈伸2回宙返りに始まり、平行棒、つり輪…といったように、技を開発・発表していくことになる。

塚原氏が言うところの体操遊び(新技の開発)は1人ではなしえなかったようだ。「レギュラーにもなってない連中が多かったんだけど、そういう連中と一緒に本当に遊ぶような感覚で『こんなことできないか』『あんなことはできないか』って体操遊びをしていった。3年生・4年生になるとそういう練習時間のほうが多かった」という。そうこうしているうちに先生方も諦めるようになり、「塚原は勝手にやれ」とも言われるようになった。そのときにいろんな技術に挑戦することができた。1人ではなく、遊び心をもって共に技に取り組む仲間がいたことも技の開発を促進させた要因のようだ。

また、自分が挑戦したことが新しい技となり、結果、自身の名前が技の名前として残っていくことについては「体操界に対する貢献なんだと思います。要するに僕の世界の中では常に体操競技っていうのは技術への挑戦だし、それが体操競技の醍醐味であると思う。技の開発があつての体操競技だと思ってる。それは今も続いている」と、自身の体操観について塚原氏は語る。この回想からも読み取れるように、塚原氏にとって技の開発は器械体操そのものであり、また、器械体操界に対する貢献であるという考え方が根幹にあると言え

るだろう。塚原氏は選手とコーチの関係性についてさらに続ける。「新しい技を作り出すには、『感』っていうのがあるんですかね、その技術に対する『感』っていうのが、自分でもなんかいろいろすごく考えて研究してやってるみたいなんですけどね。コーチは邪魔しちゃいけないんです、コーチのレベルっていうのは、超トップレベルの選手の世界にはいないから、彼ら(トップアスリート)は違うことを考えてるわけですよ。自分がやれる技術っていうのは、それは世界のトップのところに来てるわけだから、これをコーチの人なんかはやったことないわけだから、月面宙返り、伸身月面なんていうのだからってコーチの人ってやれないわけでしょう。内村の世界なんて誰も分かんない。当時も、だからそうだったんですよ。僕もあります。ツカハラ跳びやってたって、自分がやったことないことを勝手にやってるんだから、選手が、だから指導者は何も言えないよね」

誰も知らない世界、独自の世界がそこには存在する。「そういう世界からしか新しいものって生まれないでしょう、基本的にはね。そう、コロンブスじゃないけどね。最初にそういうものを発見したりすることの、大変っていうわけじゃないんだらうけど、そこが楽しいんですけどね。そういう誰もできないことにどんどん挑戦していくというそういう意思というか、それ、持っている人がいるんだよね、それはとめちゃいけないし」と技に挑戦することの意義についてまとめた。

塚原氏は体操選手として過去3回のオリンピックに出場している。一度目はメキシコオリンピックであり、日体大の在籍中に出場した。

大学1年のときにレギュラーになったが、肩を痛めつまずいた時期があった。2年生に進級する頃には回復し、毎日の練習も思いっきりできるようになると、オリンピックの予選に出場することになる。「第1予選が36番。2次予選行ったら18番ぐらい。その頃からもしかしたらオリンピック選手になるんじゃないかな」と意識するようになる。雲の上の話が現実的になった瞬間であり、真

面目に練習に取り組んだ結果、メキシコオリンピックの代表の切符をつかむことになった。

しかし、塚原氏は当時、候補選手にもなっていなかったことから全てが初めてだったという。そのため、体調整や食事、時差の問題など海外遠征については全く知識がなかった。

これまでは「『一生懸命頑張ればいい、初めてオリンピック選手になったんだから』って思って練習したら疲れちゃって、あんまりいい成績残せなかった。でも、『他の連中がみんな大変上手だったから、団体の金メダルはいただいたけれども、私の、個人にとっては散々なオリンピックだった』と語る。この経験がきっかけで、それまではただがむしゃらに取り組んできた体操に対する考え方が大きく変わり、塚原氏には自分自身の練習法へのこだわりが生まれていく。例えば、「自分自身の体操というか自分自身の性格だとか、どういうふう体操競技に取り組んでいったらいいのかってことを、真剣にそのときから考える」ようになった。自分の欠点だとか長所だとか、対処だとか、そういうことをすごく意識するようになり、自分が向いてる練習方法は何かを真剣に考えて体操をやるようになった。

メキシコオリンピックの経験は塚原氏に練習方法の問い直しという新しい視点をもたらした。帰国後は、後のツカハラ跳びにつながる体操遊びに取り組み始めていたという。「僕は跳馬ってのがすごく苦手だったんです。この欠点を何とかしないとイケないなという思いが強かった。そうしたら遊んでるときになんか変なことができて、『こんな面白い!』というのがあったんでしょね。それがツカハラ跳びになりました。まさに自分の欠点というものをしっかりと意識したことによって生まれた技がツカハラ跳びなんです」と語る。

このツカハラ跳びを完成させたことが原動力となり、塚原氏は次なる課題を克服していく。それは体操選手にしては身体が大きいといった体格と技との問題であった。塚原氏は回転やかひねり系

の技に苦手意識を持っており、それを何とか改善しようと考えて挑戦したのがトランポリンであった（当時の体操界では、回る動作とひねる動作が分かれていた）。トランポリンの空中動作は非常に異様に感じ、危ないとも思ったようだ。しかし、次第に空中での身体感覚（こうふあーっとう、変な動きするんですよ、ひねっちゃうから）を経験していくうちに「これ、体操の世界にこういう動きないな。じゃあ、体操競技の中でやればまたこれ、誰もできない技だ、新しい技になると思った」という。これまでの体操界には、空中で表現する動作は縦にぐるぐると回転する、あるいは体を横にひねるといような単調な技術しかなかった。ところが、トランポリンのーフイン・ーフアウトを経験するうちに「1回まわる間に半ひねりする。また2回目にはさらに半分ひねって元に戻ってくる。要するに、回りながらもひねるとい大変な技術革新がそこにあった」という。それが後の新月面、伸身月面、伸身新月面と言われる技を生み出すことになる。

次の大会となるミュンヘンオリンピックでは、「月面宙返り」という新しい技を何とか成功させることが第一の目標となった。また、同オリンピックに参加したときにはテロ事件にも遭遇した。僕らがいた選手の棟の一つ向こうの棟でテロが起きた。アラブゲリラによって11名の貴い選手の命が奪われた。当時は塚原氏も選手村にいたため、その時の様子は鮮明に覚えている。「館内放送で『窓に近づかないように』と警告のメッセージが流れ、とにかくそういう事件が発生したから、と。ぱりぱりといった戦闘音が聞こえてきて、部屋でみんな隠れた。そしたら一時したらヘリコプターがわあっと上がって行って」と当時の様子を語る。

沈静化したら次の日のニュースでは全員死亡と報道されていた。塚原氏曰く、ミュンヘンオリンピックが兵隊によって警戒態勢で開催されるようになり、次のモントリオール大会では更に警備が

厳重になったという。「村の周り全部、軽機関銃を持った兵隊がいて、オリンピックって変わったなと思いましたね」と述べ、この経験からあらためてメキシコとミュンヘンでのオリンピックでは大きく違うと語る。「それはオリンピックが平和の祭典であるかどうかということです。メキシコオリンピックでは、出入りも結構自由だったのが、一気に変わりましたね。本当に大変な事件ですよ、オリンピックにとっては本当に。世の中、社会、国際情勢、国際社会が戦争・政治・権力との闘いにもなった。それにオリンピックっていうものが貢献していく、そういう平和運動にね。だからオリンピックの中で平和運動が一番大きな問題じゃないかなと思ってんですけどね」と述べた。

3回目のオリンピックとなったモントリオール大会では、彼自身も、選手としても精神的にも結構充実してきたようだ。「ミュンヘン終わってすぐうちのワイフと結婚したしね。日体大の先生だったんだけど、それなりに選手生活を充実して送ってて。」と語る。結婚して以降も技への挑戦は続いた。

塚原氏にとっては、モントリオール大会で代表になった時期が選手生活として最も充実していたという。塚原氏個人の成績をみても、このオリンピックで五つのメダルを獲得している。

一方で、モントリオールは体操日本にとってオリンピック5連勝がかかった大会でもあった。

団体戦では代表6名と補欠1名の計7名が代表選手として選抜されており、そのうち4名がすでに（笠松茂氏・監物永三氏・加藤澤男氏・塚原光男氏）金メダリストであり、ベテランの域に達する選手であった。強化合宿を2カ月間行い、みんなで和気あいあいと「当たり前になれば金メダルが取れる」との思いで現地入りしたが、そこで大変なことが起きる。これからというときにエースの笠松が盲腸になり棄権。補欠の選手が演技をすることになったのだ。

大会期間中に1日女子の競技を挟んで、男子体

操団体の演技が行われた。「これもまたドラマチックな競技になるとは誰もが予想してないんだよね」と塚原氏は回想する。日本代表は床運動から演技を開始した。苦手とされていたあん馬も上手くいき「さあ、このまま逆転だ」と勢いによってつり輪の演技が始まったら2番目の演技者である藤本氏が着地を失敗し、右ひざを骨折するというアクシデントが発生する。団体戦は6名で競われるが、この時点で日本代表は5名での競技を余儀なくされた。「正直言って大変追い込まれたりしたが、でも、そういう状況になったからこそ結束力が高まり、『誰も失敗できないぞっ』という一つの緊張感生まれ、結束力につながっていった」という。当時の演技の算出方法としては、6名の演技者の中でベスト5の得点を採用するルールだった。そのため、一人分の余裕がなくなってしまったが、追い込まれた状況の中で次の平行棒も5名がそれぞれに演技を完璧にした。そして最後の鉄棒の演技がこの大会の勝者を決める流れとなる。「これを決めればっていうことでその差はぎりぎりですよ、ソ連とね。最後の鉄棒に全ての観客も体操界も関係者もメディアも注目するわけですよ。そん中で、また完璧な演技が続いていくわけですよ。1番目に梶山選手がやって完璧に9.75。2番目が五十嵐選手がやって9.85。3番目が加藤選手、彼は9.7。4番目が監物選手で9.84。10点満点中の得点の中で、高得点の連続ですよ、完璧に」

最後の演技者が塚原氏であり、9.5以上の得点を出せば日本が勝利、それ以下だったら負けという究極の状況だった。「先に終わった連中が僕をにらんでるわけ。あとはお前だけだろうっていうような思いで、このプレッシャーね。演技するまでは3分から5分ぐらいなんだけど、そのとき、前半は駄目でしたね。がくがく震えちゃって。絶対的な成功、これ決めなきゃえらいことになるぞっっていうことを分かっているからね。でも、幸い開き直れたんですよ。自分の弱さみたいなのを素直に認めた瞬間があったんですよ。だらしな

なって思って、こんなもんだなって。そしたら、今までの震えがぱっと止まって、目の前がぱっと開いたような感じがして。われに返ったっていうような感じかな、言葉で言えば、しめたって思った、その瞬間、その瞬間に深呼吸して、運にまかせていけって思ったら体が動いて鉄棒に飛びつけた」という。

10回やって10回成功するような訓練をしてきたことで、緊張しながらも自然に体が動いてくれた。最後の降り技では月面宙返りが成功し9.9という大会最高得点が出て、日本がオリンピック5連勝を達成することができた。0.4差の逆転勝利だった。

次の日の新聞には「日本男子体操、奇跡の逆転優勝。奇跡の、神風が吹いた男子体操」と大きな見出しが紙面を飾った。「奇跡」の文字が多用されたが、塚原氏の見解は異なるようだ。「このような状況下で勝てたのは、日本の体操にそういう技術力、基本技術があったからだ。奇跡や精神論ではなくて、体操は最後は技術の世界だと思ってる。だから根性がなくて失敗するとか関係ないんだよね。その前に、その技術が正しいかどうかが一番大切になってくる。どんなプレッシャーがかかったって失敗しない技術っていうのは本物の技術。ちょっとプレッシャーをかけられて失敗しちゃうのは正しい技術でも何でもないと僕は思ってるから。だから技術を正確にしっかり覚えておけばミスはしないわけですよ。そこにみんなというチームワークで頑張ろうということになって、諦めないで最後まで演技をしたからこそ金メダルが取れたっていう話だと思う」と結んだ。

4. その後の人生

現在も若手育成に情熱を傾けている塚原氏であるが、自身の経験が彼を突き動かしているようだ。「結局、僕が体操競技始めたときは体育館がなく、校庭で練習したんですよ。石ころ拾ったりしてね。それが原点にあるんですよ。体操競技は

安全な施設でやるべきだと。とにかく、体育館が必要だと。オリンピック選手、世界のメダルを取るような選手にはそのメダルを取る環境が必要だと思った」と語ってくれた。

また、塚原氏は若手選手の育成に余念がない。塚原氏が勤める朝日生命体操クラブでは下部組織の会員を含めると約700名が在籍しているという。その中でも年間で1～2名が選手育成コースにあがってくる。このような環境の中で塚原氏が問題視しているのが、クラブ経営のあり方だ。近年のクラブ事情としては、選手を指導者が囲いたいが故にクラブ間の交流が途絶えてることの問題点について次のように指摘する。

「クラブ間の友好が少なくなっている。理想のクラブのモデルは、もっとクラブの垣根を超えて刺激し合えるようなものが大切だ。優秀な選手はそのクラブの持ちもんじゃないんですよ。だけど、なぜか選手を私物化しちゃうんです。あるいは指導員、コーチにも交流する機会を嫌がるようなケースもある。だから、せっかく選手に素質があっても広がっていかない。そういう選手には必ずいろんな世界のトップレベルの指導だとか、プログラムを与えてやりたいと思う。だから今、これは一つの理想、こういう形がいいのかなって思ってやってることは、2020年の東京オリンピック・パラリンピック対策っていうことで、日本体操協会が企画（塚原氏は現副会長）して、所属クラブの所属に関係なく朝日体操クラブとNTC（ナショナルトレーニングセンター）を拠点に素質のある選手を集めて練習してる。強化の拠点にしているんです。世界的な優秀な指導者も呼んで基礎的な指導も展開している。今後、この仕組みを確立できれば、日本体操協会が踏襲して優秀な選手をみんな育てらるという環境がつくられていくと思うんですよ」と体操界の未来を展望した。

5. 後輩に一言

在籍している日体大の学生には、次のメッセー

ジを頂いた。

「スポーツに関わってる大学生は、小さいときからスポーツに関わって、ずっとスポーツをやってきてる。そして、大学でのスポーツ活動が今度社会人になって、選手になる人、指導者になる人。最終的には指導者になっていくわけでしょう。だとすると、本当のスポーツ、真のスポーツとは何かっていうことをもっともっと研究して勉強してもらいたいと思いますね。体育会系の先輩、後輩だけじゃなくて、スポーツの持つ素晴らしさだとか、スポーツの持つ力だとか、もっともっと勉強してもらいたいと思います。

君たちが日本のスポーツ界の未来なんだ。だから皆さんがスポーツの力だとか、スポーツの本来のあるべき姿だとか、そういうものしっかり勉強して、将来、最終的には選手を辞めれば指導者になるわけですから、本当のスポーツというものを次の子どもたちに伝えてもらいたい。そういう重要な大切な役割を、使命を持ってんだと認識してほしい。全てあなたたちが日本のスポーツの未来を作るんだという自覚と誇り、こういう素晴らしい世界を生きてるという誇りを持ってほしいと思いますし、それをしっかり自覚してほしい。大学生になるとスポーツ以外の、厳しい練習以外のことに興味を持つこともあるだろうけど、でも、スポーツをしっかり学ぶ4年間であってほしい。それをちゃんとすれば、例えば、今、社会的にも問題になっている暴力問題や体罰問題も解決できる。間違った体験が原因をつくるのだから、良い経験をしてほしい。

そして、日体大の先生たちにも伝えたい。学生教育は、要は指導者次第ということ。常にスポーツマンとして、プレイヤーとしてどうあるべきかってことを指導できるわけですから、そういう根本的なことを指導者は指導してやらにゃいかん。スポーツの力っていうのは素晴らしい力があるんだから。世の中も変えちゃうし、人も変える力がある。人格だって創られていくよね。

スポーツの力や素晴らしさ、そしてスポーツが

持つ本来のあるべき姿をしっかり専門大学として指導しなきゃだめです。学生が自分でやれるようにも指導しなきゃいけない。日体大のリーダーがしっかりそのことを自覚して、現場の先生たちや学生に伝えていくということを日本スポーツ界の為にも、お願いしたいです。だって日体しかないんだから、日本のスポーツの総本山は、というふうにならなきゃいけないと思うから、OBの一人としてそれは思うね」

塚原氏のインタビューを通じて繰り返し用いられたキーワードは「挑戦」である。それは試合に勝つための挑戦であったり、自身が楽しむ挑戦であったり、弱さを克服する挑戦であったり、時には弱さを認めるという挑戦の姿など、たくさんの挑戦を確認することができた。

最後に塚原氏にとって体操とは？との問いに、次のように答えてくれた。

「僕の原点はあれですよ、逆上がりとかと一緒に。なかなかできないでしょ。挑戦でしょ、挑戦。腕の筋肉が強くなきゃ逆上がりできなかつたり、腹筋強くなきゃできなかつたり。みんな逆上がりやるのに苦労するわけですから。体操とはね、人生のちっちゃい最初のスタート。挑戦そのものだね」

お忙しい中、貴重な時間を頂いてインタビューをさせて頂きました。インタビューにお答え頂く塚原先生はいきいきとされていて、まるで「当時

の塚原選手」とお話をさせて頂く錯覚を覚えました。そして、塚原先生の「挑戦」というスタンスが、今なお日本の体操界を牽引されていることに尊敬の念を覚えます。

最後になりますが、このような機会を頂きましたことに心から深謝申し上げます。

